

## 国際シンポジウム

グローバル化と若者の未来に関する  
アジア・シンポジウム

厚生労働省、ILO、国連大学・共催



基調講演するILOのソマビア事務局長

若者がいきいきと働き開花する社会の創造を目指して。グローバル化が加速するなか、若者の未来に向けての雇用・能力開発が世界的課題となっている。厚生労働省は、ILO、国連大学と共催でこの課題のよりよき解決に向け、一二月二日、三日の二日間、東京のUNハウス・ウ・タント国際会議場で国際シンポジウムを開催した。二日間わたるシンポジウムには、ファン・ソマビアILO事務局長、アジア一三カ国の政府代表、日本およびアジア各国の労使代表、学識経験者などが参加、「グローバル化と仕事」、「グローバル化と若年雇用」という二つのテーマでハイレベルの意見交換が行われた。

## 公正なグローバル化に向けて

シンポジウム第一日目のテーマは、

「グローバル化と仕事の世界」。近年のグローバル化の進展は、様々な産業に新たな経済機会を生み、世界経済全体で見れば飛躍的に成長が進んだことは事実。もちろんアジアもその例外ではない。しかし、その一方で失業の増大、貧困の拡大などの影響も指摘されている。こうした、グローバル化のもたらす負の側面にも目を向け、世界の人々が公平にその富を享受し、グローバル化が公正で人間中心のものとなるよう、その道筋を修正することが世界の課題となっている。この課題にチャレンジしていくため、経済活動の根幹であり社会と人々の生活を支える基本である「労働」に焦点を当て、議論しようというのが、今回のシンポジウムのテーマ。

ハンス・ファン・ヒンケル学長（国連大学）は、「公正なグローバル化に向けて」と題する基調講演の中で、「世界はかつてないほど豊かになったが、世界人口の三分の一の人々はいまだ貧しさに喘いでいる。格差は依然解決されていない。すべての人々が富を享受するには、マーケットへのアクセス改善を含め、プロセスを公正にする努力が必要」とグローバル化のプロセスにおける公正さの必要性を訴えた。

ディーセントワークは  
二一世紀の合言葉

グローバル化の社会的側面世界委員会は、その二〇〇四年の報告書で、公正で包括的かつ人々を発展の中心に据えるようなグローバル化が早急に必要であることを明らかにしている。ファン・ソマビア事務局長（ILO）は、

「雇用こそが貧困撲滅の手段。特に将来を担う若者は大切な資産である。若者にディーセントジョブを提供することは政府、労使の役目。ディーセントワークを増やすことによりグローバルイゼーションは良い方向に導かれる」と述べ、ディーセントワークという概念が、世界のすべての人々に包括的なグローバル化を可能にするための指標になるとの見解を示した。また、同局長は、ディーセントワークの概念が国連ミレニアム開発目標の中に組み込まれ、これを受けて国連、世銀、ILO三者の協力のもと若年雇用ネットワーク（Youth Employment Network-YEN）が結成されたことを報告した。YENはインドネシアを含む一〇カ国がリーダー役となり、各国の優れた経験を共有すべく行動を開始している。YEN第一回会合はILO本部のあるジュネーブで開催され、①従来のように若者を問題視するのではなく、財産(asset)として扱う②各国政府が市民団体・経済団体・労働組合および若者の組織の参加の下に若年雇用に関する行動計画を策定・実施する③すべての国家行動計画に必要な課題を四つのE—Employability（エンプロイアビリティ）、Equal opportunities（機会平等）、Entrepreneurship（起業家精神）、Employment creation（雇用創出）とする④対策の実行にあたっては国連・世銀・ILOが技術協力する——ことなどが提言された。さらに、同局長はYENについて、「日本でもニートの増加など、若年雇用に関する懸念が高まっていると聞く。日本にはアジアのイニシャチブをとって欲しい。すなわち

日本のYEN(円)を使ってアジアのYENの活動が盛り上がることを期待する」と付け加えた。

**雇用 なき成長に歯止めを**

第一日目午後のセッションでは、各国の労使代表より仕事の世界においていかにグローバル化が進展しているか、そしてそれが労働者にどのような影響を与えているのかについての報告があった。ハリマ・ヤコブ副書記長(シンガポール全国労働組合会議)は、「貧困を撲滅し、すべての人に機会を創出するためには、国家レベルおよび国際レベルでの強力な政策的介入が必要だということ」は共通の認識になっている。現在アジアの多くの国が、経済は成長したものの、雇用はそれほど創出されないという経験をしている。雇用なき成長がアジア共通の問題となっている。例えばインドではここ二〇年間で国民所得は六%伸びたが、雇用は一%しか伸びていない。しかもそのほとんどが生産性の低い仕事であり、依然として失業者も多い。多くの場合働いたとしても基本的生活を営むに足る賃金は得られていない」といった、雇用なき成長が貧困に対して何の解決策も与えていない現状を訴えた。また一方の金榮培副会長(韓国経営者総協会)は、「グローバル化は現代社会において選択の余地はなく、受入れざるを得ないもの」としたうえで、「グローバル化が直面する真の問題は、法律や制度面の変化と、習慣や行動面の変化の均衡と調和を保つことであろう」とグローバル化そのものを否定するのではなく、グローバル化によってもたらされる副次的

な影響について議論すべきとの見方を示した。

**若者のおかれている現状は**

二日目のテーマは「グローバル化と若年雇用」。世界の人口六二億のうち若者はその六分の一にあたる一〇億人強で、そのうち八五%が途上国に住んでいると言われている。若者の失業者はILOの推計によれば、全世界で七四〇〇万人にもものぼり、失業者の約四割を占める。また若年失業率は成年失業率の二倍から三倍といった状態が続いている。こうした状況についてジェーン・スチュワート雇用総局長臨時代理(ILO)は、世界的に見た若年雇用に関する総合的な展望と、二〇〇四年一〇月に行われたILO主催の「若年雇用の前途三者構成会議」の報告を基に、ILOの若年雇用に関する取り組みを報告した。また、厚生労働省の太田俊明労働担当政策統括官からは、わが国の若者がおかれている現状と、「若者自立・挑戦プラン」を中心に若年者の雇用・職業能力開発政策についての詳細な報告があり、連合の古賀伸明副会長と富士電機ホールディングスの加藤丈夫相談役が、労使の立場からそれぞれコメントした。

午後のセッションでは、それぞれ異なる分野で、実際に働いている若者四人が登壇し、自分の職業観を自らの言葉で率直に語った。若者の仕事に対する真摯で前向きな姿勢は、フリーターやニートなど統計から伝えられる暗く悲観的な日本の若者像とは別の一面を見せ、会場の共感を呼んだ。司会役を務めた玄田有史助教授(東京大学社会

科学研究所)は、「若者の悩み苦しさを社会が理解し、それぞれの目標を設定しやすき環境をつくってあげることが必要ではないか」という言葉でセッションをしめくくった。

**若者のエンプロイアビリティを高める試み**

「激化する国際競争と企業の戦略的な行動は、若者の雇用の場を揺さぶっている」とモデレータ役の諏訪康雄教授(法政大)は言う。グローバル化の波は社会的弱者である若者に対して厳しい。各国政府はこうした状況にどのように対応しようとしているのか。「グローバル化と若年雇用」と題したパネルディスカッションでは、各国の代表がパネラーとして、グローバル化した労働市場にアクセス可能な若者を育てるための各国の取り組みを報告した。

この中で、アジア六カ国における若者の能力開発政策を調査した今野浩一郎教授(学習院大)は、「アジアは多様性で特徴づけられるが、共通の政策が存在する」としたうえで、能力開発の分野で「訓練と教育の融合」と「訓練・教育と雇用の融合」といった新しいトレンドがあることを紹介した。さらに、「若者に有効な能力開発政策を作成するためには投資ポートフォリオの観点が必要。国際的なベンチマーキングのために、各国のベストプラクティスをもちよる国際的な協力的体制の構築が望まれる」という重要な提言を行った。

**若者がいきいきと働ける社会を目指して**

二日間の討議を通して得た印象を踏

まえて、高橋一生国連大学客員教授(国際基督教大)は、①高齢者雇用と若年雇用の両方を組み合わせた政策②多様な社会政策のメニューとマクロとミクロを組み合わせた経済政策③グローバル化によって減少する企業内訓練を埋める社会的施策④社会状況不安と若者が元来持つ不安で増幅された不安定さをどうやって生産的なダイナミズムに転換していくかという観点⑤お仕着せの既成キャリアアップコースではなく、若者に適合した多様なキャリアプランを提供してあげられるようなシステムづくり⑥将来のビジョンが描き難い現代において、部分的な知見を持ち寄り議論する場を継続的にもつこと——の六点が必要だと集約した。

これを受け、シンポジウム総合議長の高橋一厚生労働副大臣は、「本シンポジウムの成果が、二〇〇五年六月に開催されるILO総会における若年雇用者一般討議の場における検討の基盤とされるものと確信するとともに、二〇〇五年後半に韓国の釜山で開催される予定のILOアジア太平洋地域会合においても、グローバル化と若者の未来が重要なテーマとして位置づけられ、さらに深められることを期待する」と総括し、堀内光子ILO駐日代表の挨拶で二日間にわたるシンポジウムを閉幕した。

(国際研究部 主任調査員・天瀬光二)